

機関番号：32632

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2008～2010

課題番号：20720080

研究課題名（和文） 日本におけるワイルド劇の受容に関する比較文学・比較文化的研究

研究課題名（英文） **Comparative Literary Studies: The Japanese Reception of Oscar Wilde's Plays**

研究代表者

日高 真帆 (HIDAKA MAHO)

清泉女子大学・文学部・准教授

研究者番号：90407619

研究成果の概要（和文）：本研究では日本におけるオスカー・ワイルドの戯曲の受容について多角的視点から探究した。ワイルドは、欧米と同様に日本においても生前から今日に至るまで長らく受容されてきた。しかしながら、両者におけるワイルド受容の有り様は作品ジャンルによって極めて異なっている。本研究では、そのような異なる受容の特徴を精査することで、ワイルドによる原作のみならず日本の演劇界についても重要な特質を明らかにすることができた。

研究成果の概要（英文）：This research has explored the Japanese reception of Oscar Wilde's plays from multifarious perspectives. As in the West, the reception of Wilde in Japan covers a long history from his times to this day. However, there is a discrepancy between the Japanese reception and the Western reception in that different genres of his works have received significantly differentiated treatment. The scrutiny of the characteristics of such different receptions has revealed significant features of not only Wilde's works but also of the Japanese world of theatre.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	800,000	240,000	1,040,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・英米・英語圏文学

キーワード：比較文学、比較文化、英米文学、オスカー・ワイルド

1. 研究開始当初の背景

本研究開始以前の自身の研究を通して、演劇というものがあるワイルドの生き様や価値観そのものとも本質的に関わり、演劇的要素が

一見様相を異にするワイルドの多様な作品や人生の諸側面を繋ぐ架け橋としての役割を果たしていることが明らかになった。そして、ワイルドと演劇との関係がワイルドを捉

える上で如何に重要な意味を持ち、且つ多面的様相を呈しているか、という点について認識を高めていた。そこから、以下のような研究の必要性を強く感じるに至った。

一点目は、ワイルドの演劇世界は戯曲からのみ理解できるものではなく、多元的な次元から解明する必要があるということである。具体的には、戯曲を中心とした作品研究や舞台上演の研究に加えて、実人生におけるワイルド自身の演者としての側面やワイルドの演劇観にも着眼し、ワイルドの演劇世界を総合的に探究する必要があると考えたのである。

二点目は、ワイルドが活躍した英国でのワイルド劇の受容と日本に移入されたワイルド劇の受容に重大な齟齬があり、この点を比較文学・比較文化的アプローチにより追究する必要があるということである。具体的には、日本におけるワイルド劇の受容に関する研究を喜劇と悲劇が置かれてきた対照的状况に着眼して行うことによってこそ、その受容の全貌を明らかにすることができ、且つそれがワイルドの戯曲自体の再評価にも繋がると考えたのである。

以上のことから、ワイルド劇に焦点を当てた受容研究を行うことに大きな意義を見出し、当該研究課題を申請した次第である。

2. 研究の目的

本研究は、日本におけるオスカー・ワイルドの戯曲の受容について、比較文学・比較文化的研究を行うものである。具体的には、日本において比較的受容度が高かった悲劇作品『サロメ』と受容度が低かった喜劇作品『ウィンダムア卿夫人の扇』『つまらない女』『理想の夫』『真面目が肝心』が置かれてきた対照的状况に着眼して研究を行う。また、必要に応じて戯曲のみならず関連作品の受容や19世紀末以降の日英の演劇状況、戯曲が言語圏・文化圏を越境する際に生じる問題等も視野に入れて考察を進め、日本におけるワイルド劇の受容像の構築を試みる。更に、受容研究と関連づけてワイルドの喜劇と悲劇

の特質を追究することで、ワイルド劇の再評価を行う。

3. 研究の方法

三年間の研究期間を通して国内外のオスカー・ワイルドの研究動向を把握すべく関連資料の調査研究を進めると同時に、日本におけるワイルド受容史を俯瞰すべく関連資料の収集・分析を行う。また、従来型のテキスト分析に留まらず、戯曲と他の文学テキストとの本質的な相違である舞台上演というパフォーマンスの次元を視野に入れたアプローチも試みる。特に、実際のワイルド劇の上演の分析を行うと共に、ワイルド劇の受容の場として、ワイルドの戯曲が上演された劇場等での現地調査も行う。

4. 研究成果

本研究では、日本におけるワイルドの戯曲の受容について、特に悲劇作品と喜劇作品とが置かれてきた対照的状况に着眼し、比較文学・比較文化的研究を進めた。具体的には、まず、日本におけるワイルドの受容史における戯曲や関連作品の受容の特徴について検証した。そして、日本では『サロメ』や『ドリアン・グレイの肖像』のような悲劇的作品の受容度が高かったのとは対照的に、英国で高い評価を得てきた喜劇作品の受容度が低かった点に着眼し、ワイルドの喜劇作品と悲劇作品の特質及び受容に伴う状況の差異について検証した。

また、現代におけるワイルドの戯曲及びその翻案の上演にも視野を広げると共に、日本と英語圏諸国におけるワイルド受容の相違点についても比較研究を進めた。それにより、演劇界を始めとして日本におけるワイルドの受容の基盤の特徴や変遷について考察を深めることができた。

更に、受容について理解を深めるためにも原作の分析が不可欠であることから、戯曲を中心としたワイルドの作品研究も行った。このように受容研究と作品研究を同時に進めることにより、日本において受容が立ち遅れ

ていたワイルドの喜劇作品の再評価も行うことができた。

研究は毎年着実に進め、研究成果は図書出版や関連学会誌上での論文発表、国内外での学会発表等を通して公表してきた。特に国際学会での研究発表や海外での調査研究を通して、日本及び海外におけるワイルドの受容の基盤や受容状況の相違点について更に考察を深めて研究を発展させることができた。

特に国際学会で二度に渡って研究発表したことで、海外に向けて研究成果を発信すると共に海外の研究者達と意見交換を行うことができ、研究の更なる発展に繋がった。具体的には、2009年にグラスゴー大学で開催されたIASIL（国際アイルランド文学協会）の第33回国際大会では、“International Perspectives on Oscar Wilde”（オスカー・ワイルドへの国際的視点）と題するセッションにおいて、オーストリアや香港の研究者と共にそれぞれの国におけるワイルド受容について研究発表を行い、比較考察を深めた。また、2010年にアイルランド国立大学メイヌース校で開催されたIASILの第34回国際大会では、“Wilde and Victorian Theatre”（ワイルドとヴィクトリア朝演劇）と題するセッションにおいて日本での『サロメ』上演に関する研究発表を行い、時代背景を同じくするイギリス演劇について議論を深めた。

このような国際学会への参加を始めとして海外でも研究活動を展開したことにより、関連分野での最新の研究に触れながら本研究についても多くの刺激と示唆を得ることができた。そして、他国とは異なる日本のワイルド受容の特徴について関心が高いことを実感し、比較研究の視点を重視しながら日本におけるワイルド劇の受容像を追究する必要性と意義とを改めて確認することができた。

以上のように本研究に従事する中で、日本におけるワイルド劇の受容の特徴を明らかにするには、ワイルドの活躍の場であったロンドンや出身地であるダブリンを始めとして、関連性の高い英語圏の諸都市での受容状

況にまで視野を広げた比較研究をより重点的に行う必要性和意義を強く認識するに至った。そのように研究範囲を拡張するには当初の計画期間では不十分であることから、2011年度からは基盤研究(C)による三年計画の新たな研究課題「ワイルド受容の系譜—日本と英語圏諸国との比較研究—」により本研究を引き継ぎ、一層発展させることとなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 単著「オスカー・ワイルドの機智—日本に於けるワイルド受容に関する一考察—」日高真帆、『比較文化研究』第85号、日本比較文化学会、PP.153-162、2009年、査読有
- ② 単著「オスカー・ワイルドとアメリカ、そしてオーストラリア」日高真帆、『British Drama Studies』第4号、英国演劇協会、PP.15-28、2008年、査読有

〔学会発表〕（計5件）

- ① 日高真帆、“Japanese Transfigurations of *Salomé*”、IASIL (The International Association for the Study of Irish Literatures)、2010年7月27日、National University of Ireland, Maynooth
- ② 日高真帆、「錯綜する知覚世界—ワイルド作『サロメ』に関する一考察—」西洋比較演劇研究会、2010年1月23日、成城大学
- ③ 日高真帆、“Japanese Reception of Oscar Wilde: Comedy and Tragedy”、IASIL (The International Association for the Study of Irish Literatures)、2009年7月28日、University of Glasgow, Scotland
- ④ 日高真帆、「ワイルド作品に於ける異文化の表象—英米豪を中心に—」2008年アイルランド研究年次大会、2008年11月29日、大阪経済大学

- ⑤ 日高真帆、「機智の越境—日本に於けるワイルド喜劇の受容—」日本比較文化学会第30回全国大会、2008年6月14日、京都大学

〔図書〕(計2件)

- ① 共著『女性・演劇・比較文化』丸橋良雄、廣田麻子、日高真帆他12名、14番目、総頁数187頁、担当部分：単著論文「愛の交錯—ワイルド喜劇を巡る愛—」(PP.160-171)英光社、2010年、査読有
- ② 共著『英国演劇の真髄—ユーモア・ウィット・エキセントリシティー』門野泉、丸橋良雄、日高真帆、総頁数213頁、担当部分：単著論文「オスカー・ワイルド」(PP.150-204)英光社、2010年、査読無

6. 研究組織

(1) 研究代表者

日高 真帆 (HIDAKA MAHO)
清泉女子大学・文学部・准教授
研究者番号：90407619